てのひらのうた

銀色

祈り

「祈り」

想いを唇にのせ
言葉の鳥に変えて
虚空へと放つ

いつか
貴方の肩にとまり
私の言葉を告げてくれるように

祈る

早

春

薄闇

薄闇

霞みの中にぼんやりと
街の明かりが見え隠れして
薄闇の中で

そっと窓に文字を書く

結露した窓は
文字に涙を溜めて
流れ落ちた先は
まだまだ遠い
春の足元

「早　朝　の」

朝の窓を開けて、
霜の降りた町並みを眺める。
風が身を切るように冷たく、
少し震えて息を吐く。

こんなにも季節は過ぎた。
昨日のことのような夏の日差しも、
既に遠い昔のようで。
暖かい息を白く吐いて、
窓を閉め陽だまりにまどろむ。
まだ朝早いんだ。
今日は休日。
過ぎ去った季節を少し、
整理してみよう。

恋

心

告白

「告　白」

『仲の良い友達だよね。』
君に先に釘をさした

カフェへ誘ったドキドキを
思わず隠してしまうため
『しまった！』と心で舌打ちながら
何でも無い顔でケーキを注文
鞄に忍ばせた小さな包みを思い
切り出し方を思案中
君は涼しい顔をしている

いろいろ駆け巡るんだよ
チヨコレイト色の甘い思惑

疑似恋愛

「擬　似　恋　愛」

まるでそこだけが別世界の中
手が届くほど近くにいるのに
手に入らない世界
薄暗いこの場所で
その光に溢れる場所を
ただただ羨望の眼差しで見ている
思いを込めてもその思いは空振り
眼差しは遠くを見つめて
決して足元に注がれない
まだ牽牛織女の方がずっと幸せだ
泣きたくなるほどせつない

恋

「恋」

ステージの上のあの人に恋をした。
それを友人に告げたら
「擬似恋愛」
だと一蹴された。
けれどね、私が好きだと思ったんだよ。
理屈じゃなくて、好きだと思ったんだよ。
これは恋だと思ったんだよ。
想いの届かない恋なんて、
巷に溢れかえっている。
その一つとどこがどう違うの？
擬似恋愛なんて言葉はどこにもない。
あるのはただ純粋な「好き」の気持ち。

そう、私が思っている間は
この気持ちは『恋』に違いないから

春

「童　　謡」

朧に霞む月をみつけて
童謡を口ずさみ
穏やかな気分になる
辺りは無機質な建物で囲まれていても
自分の心がまだ穏やかな時代にあることを確認し
これが残せるものでないことを悲しく思う

童謡の風景は何時しか記憶や記録に留まり
歌は空すべりをはじめるだろう
それでもその変化が生きていくということなら
悲しく思う必要は

ないのかもしれない

七夕

「七　夕」

駆け出して見上げる頭上の星
まばゆいばかりの宝石に満ち溢れ、
その清浄なる輝きをを落としている。
夕立によってもたらされた潤いと
地面に出来た自然の鏡に、
私はいつしか落ち込んでいる。

地面の蓄えた数々の歴史と、
人々の物語を鏡の中で聞いている。
私の隣のシャレコウベが
カタカタと音を立てながら物語って。
生ぬるい地面から見上げた空は
いつもより増して高く、
手の届かないことに落胆する。

いつごろからの物語。
七夕、牽牛、織女。
天上の物語はいつも寂しい。
常世の物語はいつも単調。

笹の葉の音、さやさやと。
降ってくるよ。
降って来るよ。
幽かな願いと呟きと。

私は笹の様にまっすぐに、
両手を伸ばして落ちてくる呟きの煌きを受け止める。

「さ　い　る　い　う」

今日、雲に隠れそうな星を思う。
流れる涙のような雨を厭う。
せめて今日だけは晴れて欲しい。
子供から大人まで、
たった二人の恋の行方を願う。
星はきらきらしく、
自分達はちっぽけでみすぼらしいけれど、
今日だけはビルの合い間からでも、
星の姿を望んで。
この気持ち、
恋に似ているかもしれない。

「さみしい雨」

祈りを捧げるかのように
空を見上げて雲の行方を追う。
天気予報では明日は雨らしくて、
牽牛と織女はまた今年も会えないのかと
物悲しく思う。

年に一度しか会えないとだと、
誰が決めてしまったのだろう。
天女の出てくるお話は、
いつだって少し悲しい。

夏

金魚

「金　魚」

夜店ですくった小さな金魚
ガラスの鉢に入れられて観賞用
小さな赤い、可愛い金魚
くりくり動く黒い目と
ぷくぷく泡のたつ口と
そして悲哀に満ちたその顔

いままでいた仲間も居らず
広い水槽でもなく
ただ、白い紙が体をこする恐怖だけはない
でも
たった一人
毎日眺められて暮らしている

夏の一刻

「夏の一刻」

すっくと背を伸ばして伸びている向日葵の陰
焼けたアスファルトに写りこんで
まるで一枚の絵画のように

陽炎の立ち昇る道を歩きながら
街を徘徊する陽炎のような自分
ゆうらふうら
どっちもつかずで歩いている
昼下がりのひと時の静寂
往来がなく、しんとする家々
それでも濃厚に人の気配だけは窺われる

真っ白な雲が水平線上に見える
それは夏色の吐息

夏の思い出

「夏の思い出」

夏の思い出がでそろう頃
現像に出しておいた写真
帰ってゆく友達
残された宿題の山

夏の終わりの盆踊り
少しだけ夜の空気に寂しさが混じり
季節の変わり目を実感する

そして僕らは逝く夏を惜しむ

幻想

回帰

「回　帰」

すべての命が回帰するという
命があろうとなかろうと
すべての元素が回帰する
この宇宙は渦を巻いて
回帰する命を飲み込んでいる
永遠なんて存在しないと言えば悲しいが
また帰ってくるよと言えばまだいい

砂漠が緑になり、また砂漠になり
人が生き、死に、また死んで
動物が食われて、食い
星が死に、また生まれ
大きなサイクルの中に私は納まっている

まるで

「まるで」

寝苦しい熱帯夜の中で
私は夢を見る
ここは水槽の底
そしてあなたは眺めている
私は熱帯魚に変わり
あなたの眼球の動きにあわせて
行きつ戻りつしている
「ああ、『夢』なんだ」
わかっていても覚める気配がない
これは夢か、現実か？

まるで胡蝶の夢のよう

ずっと

「ずっと」

どこか遠くで声が聞こえる
ずっと探していた誰かの声

見慣れた景色が瞬間
金色を帯びる

ずっとずっと遠くの記憶
ずっとずっと遠くの夢
ずっとずっと
まだ辿り着かない
どこか遠くの最果ての地
すべての魂のゆきつく場所

淚

「涙」

ほの暗い宇宙の片隅で
青白く吐息を吐く
ごく微小の確立で生まれた
豊かな星

寂しい宇宙で
夢を孕んだ

それは
宇宙を泳ぐ
マーメイドの涙

「指　先」

幾千幾万の時を超えて
ただ先へ行きたいという想いだけ
ただこの指先の先へ
たどり着きたいという想いだけ
水底から陸へ
空へ
宇宙へ
そしてその先へ

いつの日にか貴方の指先に
触れることを望みながら

「吟遊詩人の夢」

蒼い褥に私は眠る
月光冷たく砂漠は蒼く
故郷は砂の蜃気楼だと私に告げた
あの人捜し私は眠る
砂の一粒一粒が
失われた記憶をその身に含み
私の褥は夢を見る
近く、遠く、淡く、激しく
始まりに引き裂かれた半身探し
私は蒼い褥で今宵も眠る

「黄沙の果てに」

ただ一面不毛の地の果てで
鮮やかな衣装を身にまとい
軽々と踊る。
両足で大地踏みしめ、
リズミカルに、そして何より優雅に。
音楽は流れ人は歌う。
祈りを歌に、命を踊りに、
そのほとばしる生命力。
絶望を希望へとかえる力をもつ。

いつしか砂に埋もれた都、
彼らは流転し安住の地を探す。
歌に歴史を、踊りに祈りを。
身に着けた金属片を打ち鳴らし、
鮮やかに舞う。
太陽の下、月の下。
黄砂の果てで

結晶

「結　晶」

言葉は発っせられた瞬間に凝固し、
結晶と化して、
積み重なって逝く。
すでに真実も嘘も混ざり合い、
化合し、昇華され、
見分けなどつくはずも無い。

どれが真実か？
あなたにはわかりますか？

「ふわり」

流し台で食器を洗っている。
ふと洗剤を使うとき、
シャボン玉、
ぷかり。
小さな、小さなシャボン玉。
作業の手を止めて、
眺めている。
シャボン玉、
ふわり。
あまりに小さすぎるから、
ちょっとの風で舞い上がる。
どこまで飛ぶかな？
視界から消えるまで眺め、
割れて我を取り戻す。
幸せな夢を見ていたようで。
明日は青空の下で
シャボン玉、
飛ばそう。

秋

祭り

「祭り」

提灯、薄、笑い声
掛け声、だんじり、綾錦
ほうら、ほうら
聞こえるだろう？
稲穂の風に謳う声
実りの歌だ、お祭りだ
掛け声あわせておおはしゃぎ
狐の面のその下が
人ではないとわかっても

夢はどこに

「夢　は　ど　こ　に」

『この空に飛んで行けたら。』
夢をみていた少年の日。
ペンシルロケットを手に入れて、
走って海岸へと向った。
銀色に輝く機体に
とてつもなく大きな子供の夢を乗せて。
沈み行く太陽に向けた夢。
どうせなら朝日に向けて発射すればよかった。
秋の日は釣瓶落とし。
僕の夢も釣瓶落とし。

便り

「便　り」

稲の刈り入れが始まった。
彼岸花の咲き始めるころ。
干された草の匂いにまじって、
飛蝗が勢いよく跳んでゆく。
暦の上の季節は知っている。
肌寒い最近の気候も知っている。
けれどそれらになんの意味があっただろう？
体感できる季節は減った。
そう思い込んでいるだけで、
本当は今も昔も変わらない。

そうだ、今日は故郷の祭り。
遠くで聞こえた笛の音に、
私は便りを書こうと思う。

別
れ

おもいでに

「おもいでに」

夢にまで見たあなたはいつしか遠く
ただ残された残り香は甘い
浸れるほどの思い出もなく
一時の花のように過ぎ去った日々
この季節が巡るたびに棘のようにささる

あなたの涙に似たこの花を見て

「望んだのは…」

求めたものはなんでもない
貴方の心
それだけだった
けれどどこで間違えたのだろう
在る事
それが当たり前になって
貴方の心を見失った

私に残された
暗い部屋
ぼんやりと浮かぶ一輪の花

あなたのこころのようで、いたい

冬

想

「想」

カレンダーの厚みがなくなって、
なんだか寂しくなる。
仕舞い込んだ冬物を取り出して、
去年のことを思い出し笑い。
毎年こうやって時間を過ごし、
確実に年を経ていく。
着古した衣類にみつける。
暖かな毛糸に編みこまれた、
幸せな思い出。

湯船

「湯　船」

粉雪舞い散る寒い夜。
風呂に入って一心地。
かじかむ手足を伸ばしては、
天井見上て、
ため息一つ。

生きていることを実感できて、
幸せだなあと飛沫を散らす。
幸せついでに居眠り一つ。
湯に顔つけて大慌て。

まだまだ先だよ

「まだまだ先だよ」

気が早いもので、
街は聖夜に向かいはじめている。
緑と赤が街を占拠し、
金色の星はそこかしこで点滅している。
『「あわてんぼうのサンタクロース」笑えないよね。』
君の言葉に同意するよ。
赤いマフラーに首をすくめながら、
きらめくツリーの林を抜ける。

内緒

「内　緒」

風が一段とつめたくなった。
マフラーは必需品と化し、
手袋を忘れた両手はポケットが指定席。
ショーウィンドウに赤と緑が溢れ返り、
街には電飾が一段ときらめく。

今年も残り少ないんだという淋しさを、
イベントで覆い隠そうとしているみたいで、
どうも好きになれない。

それでもプレゼントを買ってしまう自分が、
とても滑稽におもえるこの季節。
じつはきっと好きなんだと思う。

内緒にしてるけどね。

年の瀬に

「年の瀬に」

指折り数えることが
出来るようになった今年。
けれど一週間さきの話をしても、
まだ鬼は笑うんだろうか？
予定を立てながら、
ちょっとだけ考える。

昨日の行事はすでに過去のことで、
周囲の感心は年末のこと。
両手いっぱいの買い物袋。
買い忘れはないよねと独り言。

仏様の煤払い。
テレビで大きく取り上げられて、
窓を拭きながら眺めてる。
師走もあと少し。
今年も穏やかに暮れてゆく。

無題

溢れる感情の中から一握りの言葉を掬い上げた。
一生懸命伝えようとしたけれど
どうしても伝えることが出来なかった。

最後に

詩をつくってもうずいぶんになります。
書き溜めて、HPで公開してと活動してきました。
ただ漫然と発表するのではなく、一度整理してみようと思い本にしてみました。
手に取ってお目にかかることができれば、とてもうれしいことです。
まだまだたくさん作った詩の中の一握りを今回はまとめてみました。
どれかひとつでも、誰かの心に残ることができれば幸せに思います。

読んでくださってありがとうございました。

てのひらのうた

http://p.booklog.jp/book/82098

著者：銀色
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mikadukiya/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/82098

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/82098

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ